



2024 年

9 月 第 1・2 週 の 主 日 礼 拝 説 教 要 約

・ 9 月 1 日 : 1. コリント書 2 : 6 - 10 .

『 隠された秘儀 』

・ 9 月 8 日 : マルコ福音書 7 : 31 - 37 .

『 解き放つ者、放たれる者 』

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

私は知恵、熟慮と共にあり、知識と慎みを備えている…主はその道の初めに私を造った、いにしえの御業の始まりとして。とこしえより、私は立てられていた、太初より、地の始まりから。まだ深淵もない時、私は生み出されていた、大いなる原初の水の源もまだない時に。

(箴言 8 : 1 2 … 2 2 - 2 4)

この旧約聖書の記述は、今日の聖書のパウロの思想と、多くの点で共鳴するものがあります。無から有が生じたとされるビッグバン説は、“知恵”の“起源”には一切触れることがなく、これは物理学の分野であるよりも、むしろ生物学（人類学？）の研究対象として扱われるようです。

ただ、元を正せば、これらの学問（物理学や生物学等々）も含めて全ての学問は“知恵”によって成り立ち、さらに精緻に究明されつつあるものばかりです。

さて、聖書の思想は無から有が生じるその前に、既に“知恵”が存在していたという立場をとります。おそらく宇宙を出現させる“知恵”も予め存在しており、これによって森羅万象が出現したのだと。けれども、これらの“知恵”の全てが開示されたのではなく、この世に対してはまだ秘蔵されたままの“知恵”が存在し、これが「秘義の中に隠された神の知恵」の正体だということです。またこれが「神を愛する者たちのために備えられた」知恵なのだと。

古今のイスラエルの暦（太陰暦）の“天地創造”の月は、私たちの太陽暦に換算すると9月にあたり、時節柄キリスト教会でも創世記の記述が読まれることがあります。第一コリント書の記述も元はこれに因んだものだったのかもしれませんが。厳密には天地創造に先行する知恵に関する内容が記されています。その知恵の中の、まだ“未開封”の知恵がイエス・キリストによって（パウロによって？）初めて開示される時が来ていることを宣言します。それがパウロの口を通して、あるいは書簡によってコリントの教会に示される（示された？）ことなのだと。これが特定の知恵であるというよりも、この知恵にもとづいて自分は宣教に勤しんでいるのだと。

だからこそ心して受けとめよというのです。ここにはパウロの確信が、漲っています。

さらに、これらの知恵は、「この世の無力な支配者たちの知恵ではない」というのです。古今東西の限りある支配者たちの時代を飛び越えて、天地創造の前から、秘義の中に隠されていた知恵が今、キリスト教の宣教によって世界にもたらされるのだと。

《 解き放つ者、放たれる者 》

「主よ、食卓の下の子犬でも、子供のパン屑はいただきます」と言い張ったシリア・フェニキアの女の信仰がイエスに受け入れられた時に、離れた所にいた女の娘の“心身の病”は癒されました（遠隔治療の成立）。イエスはそこ（ティルス）を去り、地中海沿岸を北上しシドンを經由して、今度は東の内陸部に向かい、ガリラヤ湖の北東の山間部を経て、さらに時計回りで南下し、ガリラヤ湖の東南部のデカポリスに至り、そこからリターンしてガリラヤ湖の北東岸に辿り着きます。ここもシリア・フェニキアと同じく異邦人（＝異教徒）のひしめく土地に変わりはありません。その土地にはイエスのことを“主”と呼ぶ者はいません。

けれども、現地の人々にもイエスの噂が広まっており、彼の許に聾啞の人が連れて来られます。イエスはその人を、群衆の中から連れ出します。そして、人気のない所に来て、その人の両耳に指を差し入れ、さらに舌にも触れて、天に向かって「エファタ（開け）」と言われると、「たちまち耳が開き、舌のもつれが解け」話せるようになりました。イエスは開いたばかりのその人の耳に向かって、誰にも口外するなと伝えますが、関係者の許へと戻るその人が、自分の身に起きたことを隠し通すことは不可能です。マタイ福音書の並行記事を読むとこの時、現地の人々はイエスの業を見て、「イスラエルの神を賛美した」とあります。彼らの認識では、異邦人のナザレのイエスは“その神”を篤く信じ、人を治癒に至らせる信仰者の一人に過ぎません。

イエスは故郷のナザレでは、殆ど何の活動（神の業）もなさらなかった（殆ど効果が現れなかった？）のですが、元から猜疑心の発生しない異郷（＝異教）の地ではイエスの業は求められ、何の抵抗もなく受け入れられたのでした。

この地球上には多くの宗教があり、それぞれの神が“存在”しているかに見えます。その中で最も信仰者が多いのがキリスト教です。聖書の教えには説得力があるからです。残念なことに多くのユダヤ人には受け入れられなかったその教えも、異邦人（＝異教徒）には、なぜか容易に受け入れられる教えとなっていたのです。

イエス・キリストの教えは、ある人には猜疑心を、またある人には信仰心をもたらしめました。これは、先週の第1コリント書の中にあった言葉がよく示しています。

目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛する者（神を愛する者）たちのために準備された。
（1.コリント書2：9）

つまり、猜疑心を抱かず、素朴に神の独り子を受け入れる者たち（非ユダヤ人）が、必然的に（優先的に？）信仰へと導かれる可能性を秘めていたのです。